

ヒューマンラブエイド (HLA) は、何をするためにつくられたの？

いじめ防止教育に取り組んできた公立小学校の校長（仲野繁）と、いじめ経験者（刀根麻理子）が、「やり方」の議論から「あり方」の実践を推奨するために作りました。

その活動内容は、以下の通りです。

1. 歌舞台「ぼっこ～いじめの復讐は伴せになること！～」(実施中)

学力第一主義の教育現場から、学芸会や演劇鑑賞の時間が激減して久しいですが、歌とダンスと芝居で紡いだ人情劇に、子ども達は瞳を輝かせて大喜びするのです。劇中の台詞にも、そこに誘導する流れもないのに、感想文には、「死ねとか死にたいって、簡単に言うてはいけないと思った」と、多くの子どもが綴っており、子どもの感受性にもっと信頼を寄せても良いのだと、改めて気づかされました。

2. 講演会「いじめ防止教育」(実施中)

HLA共同代表・仲野繁が、足立区立辰沼小学校校長在任中に確立した、「子ども主体のいじめ防止活動」の、普及と啓発を目指しています。尾木直樹先生が、法政大学の教授時代に実施された調査で、従来のいじめ防止教育に比べ、その効果は顕著であると発表されています。

3. 自治体及び関係団体との連携 (一部実施中)

いじめ問題に関心のある自治体や学校等と連携し、すでに「ぼっこ」の公演や「子ども主体のいじめ防止教育」の講演を実施していますが、更に確実な、「いじめ防止教育」の浸透を目指す団体への、具体的なレクチャー、講習を行なっています。

4. 出張いじめ駆け込み寺 (実施中)

「解決」まで導くスキルのある相談窓口に辿り着く難しさを鑑み、いじめの相談受付～助言～解決までを一連の流れとし、各分野の専門家と連携し対応します。現存しない、臨床心理士や弁護士等との連携による取り組みを定着させ、当事者の心と命を救う救急部隊としての役割を波及したいと考えます。

5. 生きる力を身につけるための「心の育成」プログラム (作成中)

心理学者と共同で、乳幼児期から感情を耕し、思いやり・感謝・許しといった道徳的な感情を育てるとともに、ストレスへのしなやかな心を育成する教育プログラム (ソーシャルエモーショナルラーニング) を保護者や教育関係者等に提供します。AI (人工知能) には不可能な「心」を健全に育てます。

6. ひきこもり&いじめ被害者「活躍支援」プロジェクト (実施中)

① いじめ被害や虐待により、自尊感情が不足している人達に向け、エンタテイメントの力を活用し、生きる力や輝きを取り戻す、支援プロジェクトを実施します。

② 同じ経験をした者同士は、年齢や性別の差を超えて、語らずとも通じ合える感覚を共有しています。その感覚を活用し、自分が味わったのと同様の、辛さや苦しみのさなかに居る小さな子ども達のために、そっと寄り添える人材を育成します。

7. 「スクールコミュニケーター (感覚の通訳者)」の緊急配備に向けた法整備への提言 (実施中)

上記6の「活躍支援」の先に、教育者や専門職とは一線を画した位置付けで、「経験者」という立場の専門職を設け、当事者同士にしかわからない「感覚の通訳」により、孤立への暴走を食い止めます。

8. ハブ空港的な役割 (実施中)

4と重複する部分もありますが、明るい未来を真剣に願う各分野の専門家と、いじめ関連団体等を連携させ、具体的な問題の解決に臨むとともに、「支え合う社会」という、希望ある「風潮」を作ることに努めてまいります。

ホームページ「ヒューマンラブエイド」をご覧ください。

児童によるいじめ防止活動

1 TKRとは何か

辰沼キッズレスキューの略称で、子ども主体のいじめ防止活動のこと。辰沼小学校の教育目標である「正義と真理が溢れる学校」を受け、いじめを防止する活動を通して「正義とは何か」を、実践を通し考えさせる教育活動のことである。正義を為すことができる大人になるための教育でもある。

2 なぜ作ったか。

発案者である校長は、中学校の長く中学校で生活指導を担当していた。現在の文科省のいじめの定義は「子どもが一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」となっている。また「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」としている。ここに現場での悩みがある。そもそも「感じ方」は人それぞれ違う。そして人間は、相手の気持ちを100%読むことはできない。よって定義が「感じ方」にしているので、いじめを100%防ぐことは不可能である。だが、無くす努力をしなければならない（特に大人は）。

現在、いじめに対しては「大人主体の対応」である。もちろん、いじめは「大人の責任が大」なので大人主体の対応は当然である。ただ残念ながら、子どもの気持ちには、大人には見えない部分が存在する。

それゆえ、親や教師が予想できない「子どもの自死」という事件も発生する。

そこで、その課題を克服するために、次のように考えた。

人間の行動は、環境に影響を受ける。ならば、学校の環境を、いじめが起きにくいものに変えればよい。それによって、いじめ加害者を減らすことができれば、いじめが減る、と考えた。そのために、TKRをつくり、いじめが起きにくい環境を作ろうとしたのである。

この活動は、子供の権利条約、アドラー心理学、脳科学、社会心理学、などを組み合わせて作った。

3 活動内容（●は常時活動、○は、不定期活動）

●パトロール ●「辰沼しぐさ」の実践

○ TKR ブロードキャスティング

「校内で起こった思いやり溢れる嬉しいできごとやいじめ」関連ニュースを昼の放送で流す。

○ いじめ相談・思いやり報告ポスト ○いじめ防止サミット ○うどん作り大会

○ 一発芸大会 ○TKR ケン玉キング決定戦 ○ゆるキャラタッピー活動

○ いじめ防止標語・ポスターコンテスト ○いじめ DVD 作成 ○フラッシュ・モブ

4 その他

平成24年10月22日に23名で発足し、平成29年2月1日現在256名（児童の57%）がT・K・Rの隊員として活動している。隊の活動前は、保護者も交えたトラブルが年に数件発生していたが、活動後は0件である。減った要因としては、児童の心に「いじめは、絶対にしてはいけない。毅然とノーと言おう」という姿勢が育ってきたことがある。現在は、トラブルが発生してもすぐ顕在化するので、早めの対応ができる。いじめ問題で大切なのは「解決より予防。大人だけでなく子どもにも、いじめが起きにくい環境づくり活動を、教育の一環として行うこと。」である。つまり、座学による教育だけでなく、具体的な活動も組み合わせ防止を行うのである。

教育者は、「いじめで苦しんで泣く子は出さない」という具体的な対応をすべきである。

*補足（いじめ防止活動を、中学や高校で立ち上げる場合）

中学校以上では、羞恥心も芽生えるので、いきなりTKRのような活動は難しい。まずは、法教育（いじめの中には、法律でいう犯罪もあり許されないものもある、ことを教える）アンガーマネジメント（怒りのコントロールスキル）ピア・カウンセリングの3つを行うことが重要である。同時に、学校は、正義を行う生徒が主役、というスタンスで指導を行う。以上を年度当初から半年間かけて行い、その後、生徒主体のいじめ防止活動を展開する。生活指導は、管理ではなく生徒の自治能力育成という視点が重要。

男女の違いに応じた教育法

<男の子の特徴>

- 1 怖いもの知らずで、いろんなところへ出かけたがる。環境適応力がある。
興味のあることにのめり込む
10歳ぐらいまでの落ち着きのなさは問題ない。発達障害ではない。
- 2 戦いごっこやすぐに喧嘩する・・・喧嘩しながら仲良くなっていく
勝負にこだわって自分の力を誇示したがる
見守る。但し、度が過ぎる場合には、「それはダメ」ということを教えてよい。
- 3 収集癖
一度に一つのことしか集中できない。
こだわりが強く、好きなことは徹底的に極めようとする。
集めるのは、男の子の能力の成長に大切。やめさせないで、気のすむまでやらせる。

<男の子の育て方>

熱中していたら応援する

好きなことに熱中⇒ドーパミン⇒やる気や意欲⇒自発的・意欲的に取り組む子供

<女の子の特徴>

- 1 おしゃべりが得意で観察力が鋭い
同時進行で色々なことができる・・・脳梁が男性とは違い、脳の領域を広くうまく使えるから。
親子で、一緒に、明るく前向きな会話の機会を作る、と良いでしょう。
- 2 共感や協調することが好き
「かわいい～」 「そうだね、かわいいよね～」と、良いことも悪いことも共感し合える
よって、仲間はずれは非常につらいこと。「お友達とは、上手くいってる？」とか、
友達関係のことを気にかけてあげる、と良いでしょう。
- 3 おしゃべり好き
一緒におしゃべりを楽しむ

<女の子の育て方>

- 1 共感してあげる！
「嫌な事」「嬉しいこと」という思いを、共有したいのが女の子です。おしゃべりが始まったら、「うん、そうなんだ」と共感をしながら話を聞きましょう。女の子の場合は、アドバイスよりも、共感してもらっただけで、気持ちが落ち着きます。
思春期以降の母娘関係は何でも言い合える関係であることが最良
- 2 母親がお手本
6歳までは男女共に母親の真似。7歳以降では、男の子は父親、女の子は母親の真似をする。
よって、女子にとっては、母親が生き方の手本。言葉使い、立ち居振る舞い、など。
「こういう子になってほしい」と思ったら、まずは母親が示す。

以上を理解し、子育てすれば、

「お母さんは自分の事をわかってくれている」⇒子供が安心⇒自己肯定感が高まる⇒積極的な子